

●読書の愉しみ、広がる世界

# 月に0冊でもいいのか、 大学生の読書

松尾 英介・丸善雄松堂株式会社代表取締役社長 × 芝井 敬司・学長



2016年2月、丸善株式会社と株式会社雄松堂書店が経営統合し、新たなスタートを切った丸善雄松堂株式会社。書籍販売を始め、学術情報・知的空間を創造し、人がより良く生きるための「知」を提供し続けている。そのトップを務める松尾英介社長と芝井敬司学長が、幼き日の本との出会いから、現在に至る読書の思い出、読書の効能、本が持つ力について語り合った。

## ◆本との出会い、読書が育んだ今の私

**芝井** 子どもの頃は、どのような本をお読みになりましたか？  
**松尾** 記憶にある最初の本は、厚さ1センチぐらいの絵入りの世界名作シリーズですね。母によると、本を与えると、ずっと読んでいたそうです。その後、内外の偉人伝なども読み始め、当時創刊された少年漫画雑誌にも熱中しました。  
中学・高校時代は、受験やクラブ活動中心であり読書はしていませんでした。ただ鉄道が好きだったから、時刻表は愛読(?)していました。あれは眺めているだけで、楽しくなるんです。芝井先生の読書の原点は？  
**芝井** そうですね、小学4年の時に百科事典を愛読するようになったことを記憶しています。学校で習うことの大半をその百科事典

で予習しました。あとは、小学校の図書室で『宇宙船ビーグル号の冒険』などのサイエンス・フィクション、怪盗ルパンやシャーロック・ホームズを始め、神話や歴史物に関するものも手にしたことを覚えています。  
1学年上の兄がいて、その兄への対抗心からか、兄が吉川英治の『三国志』、『宮本武蔵』を読むと、私も読むという感じで競い合っていました。  
高校卒業直前に、国語の先生がおすすめの100冊を紹介してくださいました。私はその100冊を大学1年の夏休みが終わるまでに読み終わりました。その100冊の中には三浦綾子の『塩狩峠』、有吉佐和子の『華岡青洲の妻』のような小説から、中根千枝の『タテ社会の人間関係』、ルース・ベネディクトの『菊と刀』のような堅いもの、梅原猛の『水底の歌』まで網羅され、今でも私の中に残っているものばかりです。  
**◆人を動かす。社長と学長の読書術**  
**松尾** 私が大学生だった1970年代は日本の経営が世界的に注目を集めていました。経営学者J.C. アベグレンが、日本の経営の特徴として「終身雇用制」「年功序列」「企業内組合」の3点を指摘した『日本の経営』を読んで以降、日本の経営に関する本を追いかけ

て、卒業論文もオイルショックを経て大きく変化する中で「日本の経営の将来」をテーマに書きました。  
なぜ日本の会社はこのような経営の特徴を持つようになったのかという疑問から、日本人はどんな特性をもっているのかということに関心が広がり、先ほど挙げられた『菊と刀』や『タテ社会の人間関係』なども読みました。一方趣味という面では歴史物、特に戦国時代や幕末・明治が好きで、武田信玄・真田幸村などの周辺についてはかなりマニアックに読んでいました。  
社会人になってからは、経営管理、経営企画などの部署を歩いてきたので、仕事上、否応なしに勉強せざるを得ず、経営戦略、マネジメント、リーダーシップに関するものを読みました。有名なものでは、ドラッカーやジム・コリンズの『ビジョナリーカンパニー』、G.ハメルの『コア・コンピタンス経営』など。  
仕事を始めて、企業小説やノンフィクションの面白さを感じるようになりました。自分と重ねて共感する個所が出てくるんですね。かつてM&Aに携わったこともあって、その関連のノンフィクションは結構読みました。なかでも、A.R.ソーキンの『リーマン・ショック・コンフィデンシャル』は緊迫した状況の中で、大きな決断を迫られる企業家の姿がリアルに描かれていて面白かったです。

**芝井** 私も読みました。リーマン・ショックは私たちが生きている時代に起きた大きな金融ショックでした。当時は100年に1度の大きな事件になるかもしれないか、ある種のカタストロフィのにおいがしました。あれはいったい何だったのか、歴史を専門とする私にとっては興味深いところですね。だから、リーマン・ショック後の危機対応にあたった、アメリカの財務長官ポールソンやニューヨーク連邦準備銀行総裁ガイトナーの回顧録も読みました。  
**松尾** 意外な共通の本がありましたね。  
**芝井** 文学部長に着任してから、私はリーダー論なども読むようになりました。それ以前はあまり手が出る領域ではありませんでした。しかし、組織の中で人を動かすことにかかわらざるを得ない立場になると、自分の感覚と経験だけでは対応できず、本に知識を求めざるを得ない。リーダー論がどのように論じられて、どこが勘どころかを知っておきたかったのです。印象に残っているのは金井壽宏さんの『リーダーシップ入門』ですね。  
**松尾** 私も金井さんの本は読みました。  
**芝井** 三枝匡さんの3冊の経営論シリーズも読みました。人が組織に入って何ができるかなどについては、なるほどと思うことがありました。  
**松尾** 小説形式になっているから面白く読めますよね。企業経営に関する本では、マイケル・ポーターの『競争優位の戦略』が、これは読書の対象とはいえませんが、競争戦略の理論的・体系的著書として有名です。気軽に読める企業小説では、これは大学時代からですが、城山三郎の著作をたくさん読みました。  
**芝井** 私も好きな作家ですよ。洪沢栄一を描いた『雄気堂々』が面白かった。  
**松尾** そうですね。石田禮助を書いた作品はお読みになりました？『粗にして野だが卑ではない』。私が社員に言い続けている言葉です。卑でない堂々とした仕事をやっていこうと。

## ◆小説も評論も数学も科学も、尽きない好奇心

**松尾** 私は週2、3回丸の内や日本橋にある丸善に行って本探しをするのですが、今日はこの1年ぐらいで読んだ本の中で、面白かったものを数点持参しました。ビル・エモット『「西洋」の終わり』、内田洋子『モンテレージョ 小さな村の旅する本屋の物語』、見城徹『読書という荒野』、木村泰司『西洋美術史』、辻村深月『かがみの孤城』、佐藤勝彦『「量子論」を楽しむ本』、カズオ・イシグロ『日の名残り』……。エリック・リース『スタートアップ・ウェイ』、



■対談



知と学びにかかわる新たな商品・サービスを扱う事業を創造し、大学をはじめとしたお客様の課題に対するソリューションを提供していかないとはいけません。

これは起業の話ですが、当社のような歴史の長い企業でも、継続的に新しい事業を生み出していかなければなりません。その点では学ぶべきものがあると思ひ、手に取りました。

**芝井** 興味深いリストですね。本学も重要なテーマの1つとして取り組んでいるのがスタートアップです。本学の梅田キャンパス2階には、起業やその支援に関心のある者同士が出会い、交流する場「START UP CAFE」を設置し、少しずつではありますが実を結んでいます。

**松尾** 理系の本もお読みになりますか？

**芝井** 特に分野を問わず幅広く読みます。今年は貴社にもご協力いただきながら、「新入生に贈る100冊」を選びました。その中に、私は『ビューティフル・マインド』と『素数の音楽』の2点の理系の本を盛り込みました。『ビューティフル・マインド』は、ナッシュという数学者が若い時に才能を発揮しながらも、一時は精神的に病み、最終的にノーベル経済学賞を受賞する話で、これはとても心に残っています。

◆本がある場所を持つ、心動かす力

**松尾** 残念ながら、出版市場は長い間縮小傾向にあり、ピーク時の半分に近い、約1兆4,000億円となっています。一方で、電子

書籍市場は既に約2,500億円まで拡大しています。今の学生はタブレットで電子書籍を読むことに違和感がないようですね。

実は私も、小説は結構電子書籍で読んでいまして、三浦綾子作品は先ほど挙げられた『塩狩峠』を含めて40冊くらい読みました。

**芝井** 貴社にもご協力いただき、今年度、本学の図書館で4万タイトルの電子書籍を無料で読めるサービスを提供しましたが、学生が大学にいない夏休み期間も含めて、アクセス数は月平均約3,000件にも達しました。

**松尾** 電子書籍の利用拡大と市場の紙離れは顕著ですが、一方で紙の本が持つ力は相変わらず大きいと私は感じています。

そこで、読書体験の効用をさまざまな場面で活用しようと、当社では「本のある場づくり」を行う、BOOQ(ブック)と言うサービス事業を新たに展開しています。

この事業は店舗や施設に合わせて、機能的、情緒的、社会的に価値を高めることを目的に、本を選び、良質な空間を創り出すお手伝いをするものです。例えば、地域の特産品と本を並べて陳列することもあります。商品だけの訴求力ではなく、それに本というものをかけ合わせることで、その地域への好奇心を刺激し、両者の購買を促進することができるでしょう。Book Cafeもいろいろな形で展開され、空間デザインから什器・選書・運営まで携わっています

また、埼玉県桶川市では、市民のための知の空間をつくりたいという自治体のニーズに応じて、駅前建物に地域の文化、交流の拠点として開設された「OKEGAWA hon プラス+」の全体デザインを請け負いました。ここは、図書館、当社書店、カフェ、イベントスペースから構成され、当社はイベントの運営も担当しています。地域の大学、博物館などの協力を得て、大学生が課外活動の発表を始め、子供向けの科学教室、市民向けのワークショップなどを継続的に実施しています。このようなニーズは各地にあるのではないかと考えています。

**芝井** 本の背表紙が整然と並んでいるのを目の当たりにすると多くの人が心を動かされます。有名な図書館は必ず人々を圧倒するような大規模な展示の方法を取っています。例えば、大英図書館の旧図書室は、大きなドーム天井の巨大な円形の部屋にもものすごいボリュームで本が存在していることを強調していました。それは圧巻としか言いようがありません。単に本が並んでいるのではなく、これこそが人類の文化であると誇示しているようなところがあります。それは紙の本がある場所だけが持つ、ある種の力なのかなと感じます。

◆学生は無理してでも本を読んでほしい

**芝井** 本を読むことはやはり文化的な力だと思ひます。本なんて読まなくていいじゃないかという声もあるかもしれない。しかし、それではこれまで人間が育んできた文化が次世代にきちんと継承されない。だから、学生にはぜひ無理してでも本を読んでほしい。読み進めるうちに必ず楽しいものに会えるものです。

アメリカの大学は学生たちに半ば強制的に本を読ませる形で授業をします。学生たちは年間100冊程度の本を読むことになります。これを4年間続けると400冊。一方、日本の学生は53.1%が1カ月

の読書量ゼロという調査結果(全国大学生生活協同組合連合会調査による)があります。これでは、日本の大学がきちんとした教育をしていますと言っても世界には通用しません。学生はしっかりと本を読んで本気で勉強しないと世界で通用する能力が身につけません。

**松尾** 何から読んだらいいかわからないから、お薦めの本を教えてくださいという学生が少なからずいるのではないのでしょうか？

**芝井** そうかもしれません。だから、おせっかいかもしれませんが、学生の活字離れが叫ばれる今、やはり「面白い本がいろいろあるよ」というメッセージを出さないとはいけません。「新入生に贈る100冊」はそこから生まれた企画でした。貴社にはご協力いただきまして本当にありがとうございました。今後も、いろいろとお力添えください。

**松尾** もちろんです。丸善創業者の早矢仕有明が「丸屋商社之記」という文章を残しています。それを読むと、当時、西洋に関心を持ち、新しいものをどんどん取り入れ、国内に文化を広めようとするパイオニア精神が非常に強かったことが分かります。

2019年、当社はその前身である丸善株式会社の創立から150周年を迎えます。本の販売が大切な事業の1つであることは変わりませんが、今は、もう新しい文物を輸入する商売の時代ではなくなっています。ですから本の販売に加えて、電子書籍、選書サービス、本のある場所づくりなど、知と学びにかかわる新たな商品・サービスを扱う事業を創造し、大学をはじめとしたお客様の課題に対するソリューションを提供していかないとはいけません。それが、創業時からのパイオニア精神を発揮した、これからの挑戦だと思っています。

本なんて読まなくていいじゃないかという声もあるかもしれない。しかし、それではこれまで人間が育んできた文化が次世代にきちんと継承されない。



**松尾 英介**(まつお えいすけ)  
丸善雄松堂代表取締役社長 1953年東京生まれ。76年慶応義塾大学経済学部卒。同年、大日本印刷株式会社入社。2005年同社事業企画推進室長、08年丸善(現丸善雄松堂)常務取締役管理本部長、10年CHIグループ(現丸善CHIホールディングス)取締役を兼務、12年より丸善(現丸善雄松堂)代表取締役社長。丸善ジュンク堂書店取締役、関西図書館流通センター取締役(11年～)、丸善出版取締役(11年～)、丸善CHIホールディングス専務取締役(13年～)も現在務める。

**芝井 敬司**(しばい けいじ)  
1956年大阪生まれ。78年京都大学文学部卒。81年京都大学大学院文学研究科博士課程後期課程中途退学。84年関西大学に着任し、専任講師、助教授を経て、94年文学部教授。文学部長、副学長を歴任し、2016年10月に学長に就任。一般社団法人日本私立大学連盟常務理事。主な共著に「新しい史学概論」IEUと日本語「あかねさす」国際交流「など。